ロストロギア×なのは

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロストロギア×なのは

【Ｎコード】
Ｎ４３７０Ｚ

【作者名】
ユウスケ

【あらすじ】
タイトル通り、ロストロギアとなのはのラブストーリー？です。
一応ノーマルのつもりです。思いつきで書きました。後悔は……
……してないと思う。

深々と雪が降る。ただただ重力に従って天空から降り注ぎ、大地を白く染め上げる。　薄暗い灰色の空から舞い降りる純白の輝きは、音も無く大地に降り積もり、葉を全て落とした寂しい森を真っ白に塗り替える。

遥か昔、此処は巨大な都市だった。人々は物を作り、助け合い、話し合い、争い合い、そして愛し合う。動物たちは自然と共に活き、その命を次代に繋いだ。けれどそれもかつての話。今は、ただ森が広がり、小高い丘の上に神を祀る神殿だった跡が残っているだけ。

忘れられたモノが眠る土地。それがこの神殿の跡がある場所。光の届かぬ暗黒の淵に、それはある。

決して目覚めぬように。決して触れられぬように。決して知られぬように。

なのに今、ここには沢山の人が居る。青い服を来た男性が数人と、赤と白の服を着た少女が二人だ。彼女たちは何かと戦っている。此処には本来あるはずのない何かと。

機械のソーセージの様なそれは、少女二人に圧倒されて次々と破壊され、爆発していく。

「いくよ！　ヴィータちゃん！」

「おうよ！　てめぇら纏めてぶっ潰す！」

赤い服の少女が鉄槌を振るって紅い軌跡と共に空を舞い、白い服の少女が桜色の閃光を解き放って次々と不愉快な機械を破壊していく。

だが――

「……っ！！　……かはっ！？」

白い服の少女は突然現れた機械にその小さな体を貫かれた。あのあまりにも衝撃的な光景に、その場の時が止まった。

しかし、白い服の少女は桜色の光球を放って自分を貫いている機械を破壊。爆発によって地面に向かって落下し、叩き付けられる。その際に、持っていたピンク色の杖が二つに砕ける。

そして、時は動き出す。

「なのはぁぁーー！！」

赤い服の少女が全速力で地面にお叩き付けられたまま動かない白い服の少女に駆け寄る。少女の白い服は血で真っ赤に染まり、その胸から突き出た金属刃には滴るほどの血が流れていた。

「担架を早く！！　医療班何やってんだ！！」

赤い服の少女が叫ぶ。それを受けてか、白服の少女が僅かに目を開けた。小さく口を動かしているが、聞こえてくるのは空気が喉を抜ける音だけ。それが逆に痛々しく、紅い服の少女は泣きそうになる。

「しゃべんな！　直ぐに助けてやるから！」

赤い服の少女が白い服の少女に話し掛ける。白い服の少女は安心させようと必死に笑おうとするが、大量の血液を失いつつある身体は表情筋すらも上手く動かせない。

白い服の少女が倒れる場所は、少女の流す血で真っ赤に染まり、血の水たまりが出来ている。そして、次第に白い服の少女の瞼が閉

じていき始めた。

「お、おい。なのは？　寝るな、寝たら死ぬ！」

赤い服の少女が赤い服の少女の呼びかけも空しく、白い服の少女は意識を失いつつある。

だがそれでも、白い服の少女は生きようと足掻く。仲間の為に、友の為に、そして何より、自分の為に。

死にたくない

と白い服の少女の口が動いた瞬間。白い服の少女を中心に、純白の光が地面から噴き出した。

「おわっ！？」

赤い服の少女はその光に弾かれる様に吹き飛ばされるも、空中で体制を整える。そして見たモノは、複雑に描かれた魔方陣の様な円状の陣が白い服の少女を包んでいた。

更に、白い服の少女はゆっくりと魔方陣の中に沈んでいく。まるで底なしの沼に沈んでいくようにゆっくりと

「なのは！　なのはぁ！」

赤い服の少女が叫びながら必死に手を伸ばすが、何かに阻まれているかのように届かない。

そうしている間にも、白い服の少女は沈んでいく。

「なのはぁあああ！！」

赤い服の少女の叫びもむなしく、白い服の少女は完全に沈み込むと同時に消えてしまった。

その頃、白い服の少女は真っ暗な空間にいた。血に濡れたその小さな体は、ゆっくりと重力に従って降りていく。

イキタイ　カ

少女は頷く。

コレカラ　ガ　ツラク　テモ　カ

少女は再び頷く。

キミ　ノ　ネガイ　ヲ　カナエル　コトハ　デキル　デモ　ソレガ　キミ　ノ　ノゾミ　ト　ハ　カギラナイ　トシテモ　カ

少女は三度頷く。

ワタシ　ハ　ヒト　ヲ　アイスルモノ　ユエニ　ソノ　アイ　ヲ　ヒトリ　ニ　アタエル　コトハ　デキナイ　シカシ――

少女が頷いたその時、少女の前に光を放つ少年とも少女とも見分けのつかない三対六枚の純白の翼を持つ天使が、まるで初めからそこにいたかのように現れる。

ワタシ　ハ　ワタシ　ノ　アイ　ヲ　キミ　ニ　キミ　ダケ　ニ
アゲル

天使は、ゆっくりと地に濡れた少女の青くなった顔に自らの顔を近づける。

キミ　モ　ワタシ　ヲ　アイシテ

そして静かにその頬に両手を添え――

キミ　ヲ　タスケル　カラ

優しく、触れるぐらいのキスをした。
途端。翼を持つ者から、キスを通じて少女の身体に流れ込む。少女に流れ込んだ光は、少女の身体の傷を瞬く間に消し去っていく。
やがて少女の傷が完全に癒えた頃、天使は少女の唇からゆっくり自分の唇を離す。そして、少女がゆっくりと目を覚ます。

「……生き、てる」

ワタシ　ノ　イトシイヒト　コレガ　ワタシ　ノ　チカラ

「愛しっ――！？　もしかしなくても私の事、だよね？」

天使は何も答えず、ニコリと笑みを浮かべるだけ。

ワタシ　ノ　アイ　ハ　エイエン　ニ　アナタ　ノ　モノ　ダカラ　アナタ　モ　ワタシ　ヲ　アイシテ

「あ、愛してって……」

少女は顔を真っ赤にして慌てる。そんな可愛らしい様子を見て天使は微笑み、少女の手に自らの手を重ねる。

「ぁ……」

ワタシ　ハ　ヒト　ヲ　アイスルモノ　アナタ　ガ　ワタシ　ヲ
ワスレナイ　コト　ソレガ　ワタシ　ヘ　ノ　アイ

「うん、忘れない。こんなに優しくて、暖かい手を……私、絶対に忘れないよ」

アリガトウ

天使が嬉しそうに微笑んだ。その時、少女の身体が徐々に浮上し始めた。しかし、天使はそこから動かず、徐々に二人は離れていく。

「ま、待って！　あなたも一緒に！」

ワタシ　ハ　ココカラ　デラレ　ナイ

少女は必死に繋がった手を握り、話すまいと力を握りしめる。だが、その甲斐も空しく少女の手は天使からするりと抜けてしまう。

マッテル　ヨ　ズット　ココデ　イツマデモ

地上に向かって登っていく少女を天使は見上げ、哀しげに微笑んだ。その微笑みを見た少女は叫んだ。

「待ってて！　絶対に会いに来るから！　絶対絶対！　見つけてみせるから！」

そうして少女はこの空間からいなくなった。天使一人を残して。
一人残った天使は徐々に自分自身を自分の翼で包んでいく。

イトシイヒト　マタ　アエタ

再び眠り着く天使は夢を見る。かつて、自分が永遠の眠りにつく前、人を愛し、人に愛されていたあの頃を。

アナタ　ハ　ヤクソク　ヲ　カナラズ　マモッテ　クレル

今度はいつまで眠るのかはわからない。だが、これだけは言える。

ワタシ　ハ　マチツヅケル　コノ　セカイ　ガ　キエル　ソノ
ヒマデ

かつて天使は世界を滅ぼした。とある魔法使いの手で生み出された無垢なる天使。
人を愛し、その愛ゆえに人を滅ぼした。故に、天使は眠りながら原罪の鎮魂歌を歌い続ける。何も悪くない。悪いのは自分一人だけだから。
天使は眠り、待ち続ける。自分が心の底から愛したただ一人の人間が迎えに来てくれるその時を。
最初の約束――必ずまた会いに来るという果たしてくれた。彼、いや、今は彼女となったあの人を、天使は待ち続ける。

「ナノハ」

それから十年が経った。此処が封印から数世紀、一切開く事のなかった扉が音を立てて崩れていく。
廊下から差し込む桜色の光が、その部屋を照らす。続いて入って来たのは白い服に身を包み、ピンク色の杖を左手持った女性。

「漸く……見つけたよ」

女性は部屋の中央にある祭壇の中央で、自らの翼に包まれて眠る天使を見つめ、ゆっくりと近づいていく。
その後ろには、女性の親友二人と大切な我が子の姿がある。

「十年も掛かったけど……やっと約束、守れるよ」

女性は眠り続ける天使の目の前まで来ると、手に持って杖を小さく丸い赤い宝石に変え――

「ん……」

十年前に天使がしてくれたように、女性は天使に優しく触れるキスをした。
そうして数秒後。そっと唇を離すと、天使の身体を包むつばさが輝き、ゆっくりと開いていく三対六枚の純白の翼。
完全に翼が天使の背で大きく広げられ、その女性の様な体つきでもなければ、男性の様な性器も無い。なのにとても美しいと思えてしまう天使が、漸く長き眠りから目を覚ます。

「ああ、漸く会えた。愛しい人。もう一度、抱きしめてくれるこの瞬間を、私はずっと待っていた」

天使はその金色の瞳から涙が溢れ、流れ落ちる。数世紀前に交わした約束。そして十年前に交わしたもう一つの約束。両方とも、叶えてくれた。天使が唯一愛した人間が叶えてくれた。

「傍に、貴女のと最も近い所に、居てもいいですか？」

「うん。いいよ。ずっと、私のそばにいてください」

天使と女性は互いに涙を流し、抱きしめ合う。互いの存在を確かめるかのように、その温もりを胸に刻む。

遠い遠い昔。一人の女性の様な男性が産み出した命があった。

男性はその世界で最強を名乗る魔法使い。産み出した命は天使として世界に立ち、人を愛した。

やがて二人は恋をし、愛し合った。のちに天使が人を愛するがゆえに、人を滅ぼし、自ら永久の眠りにつく日まで。

そして天使は待ち続ける。必ずもう一度会いに来ると約束してくれたあの人が、合いに来てくれる日を夢に見て。

（後書き）

……なんじゃこら？

ふとイメージが出てきたので一時間で書いてみたけど……

ホントになにこれ？　ＧＬ？　ノーマルで書いたつもりなんだけどなぁ……。

人型ロストロギア×なのは　でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4370z/

ロストロギア×なのは

2011年12月15日01時49分発行